

## 洛西広沢古墳発掘調査概報

樋口隆康

京都市右京区嵯峨野広沢西裏町四二番地の堀川高等学校所属のグラウンド内にあつた一小塚が、運動場拡張のため、昭和三十一年二月一七日からブルドーザーによつて取壊し作業がおこなわれ、翌一八日石室があらわれた。同校より京都府教育委員会文化財保護課へ連絡があり、京大へ調査方依頼があつたので、筆者は同志社大学文学部の石部正志、鈴木重治、武田桂治君らの協力を得て、同月二〇日より三月六日まで同墳の調査を行つた。

嵯峨野は京都盆地の西北隅、保津川が平地にでるすぐ北方の小地域をしめるが、ここにも数基の独立墳が散在している。とくに大覚寺門前の丸山や車折神社北方の兜塚などは、比較的大きな類で、横穴式石室が開口している。本墳は広沢池の南縁西隅に接して新設せられたグラウンドの東南端にあり、池の端から南約一五〇米の地点である。その西方約七〇米はなれたグラウンドの柵外には、塚上に稲荷を祠つた別の一墳がみとめられる。

われわれが最初に現地におもむいたときは、すでに封土の大半は削られて、わずか中心部だけがのこり、石積みも一部が取り除かれてしまつて、中には土砂が充填していた。工事担当者たちの言によれば、径二米三〇ぐらいの墳丘をなして、上面には羨道部の天井第一石が露出し、また封土の側面に穴が開いて、石室の内部がのぞけたという。いま奥壁の内面が墳丘の中央部にあると仮定して、石室全体の長さから推せば、封土の径は三〇米位あつたとしてもたしい間違ひはあるまい。その高さも現在の運動場の面が土盛りしているため明かでないが、天井石の最高所から女室床面まで三米四〇あり、天井石上方の土盛りはあまり厚くなくさうなので、四米前後の高さではなかつたかとおもわれる。石室の積み方の特別な工作としては、両側外面の凹凸部に黄褐色の粗質粘土をつめてをり、これは天井石の上方や、側壁石積みの下底部にはみとめられず、ただ両側面の石と石との間の隙間をつめて、石積の外面を平滑にしたのちに、黒色の盛土を施したとおもわれる。

内部の石室は南に口を開いた横穴式に属する。すでに女室の奥壁と、西側壁の一部、ならびに天井石二枚が失われており、羨道入口の側石も一部取り除かれた様子がみられるが、大体の構造は推すことができる。全長約一二米、女室と羨道との境目は、プランにおいては明瞭でなく、ただ四米三〇(石室内の位置は奥壁よりの距離

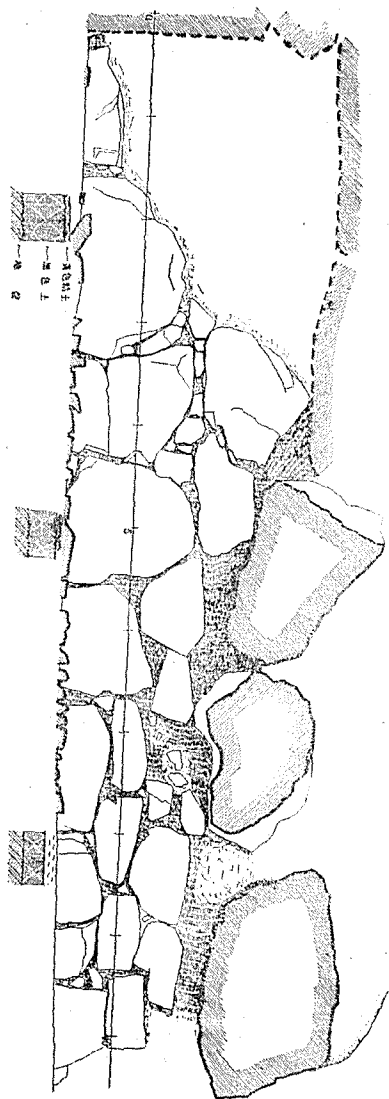
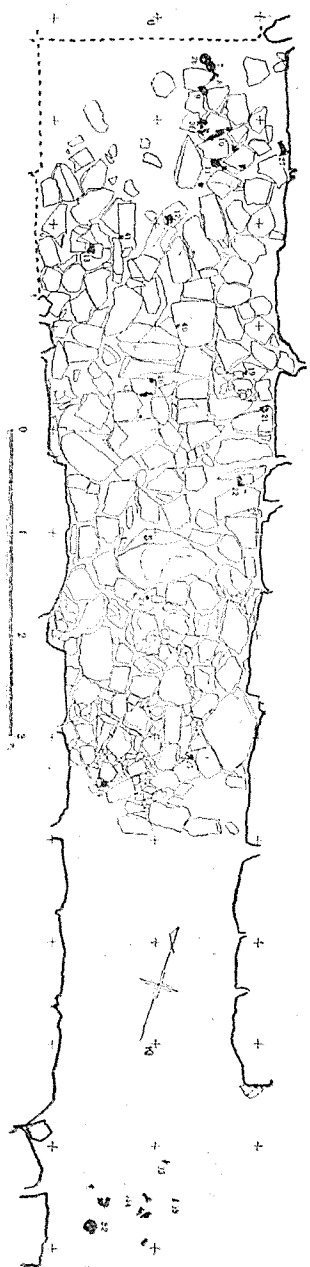
をもつてしめす。以下これに準ずる。①辺で、両側壁がわずかに内側に張りだして、そのまま入口まで壁面がつづいている。天井石もこの辺で一段下つていたので、ここを支門とすることができよう。

それにしても、玄室と羨道との幅は大差なく、玄室奥で約二米三〇、羨道の支門近くで一米九〇、中程でやや狭まり、入口でまた少し開いて一米八〇位ある。入口の石積は封土側面に露呈していたのではないかとおもわれ、天井石は一米辺でなくなつてはいるが、西側壁がそれより前方へまだ一米ばかりつづいていた。つぎに玄室の高さは天井の二石がなくなつてしまつていたので、明瞭でないが、東壁の最高点が床面から二米二〇あり、それよりもやや高かつた程度であろう。羨道部の天井石三個は残つていたが、中央石は少し落下して、東に傾斜してをり、他の二石を基準にして高さを計ると、支門近くで一米八〇、入口で一米四〇位ある。

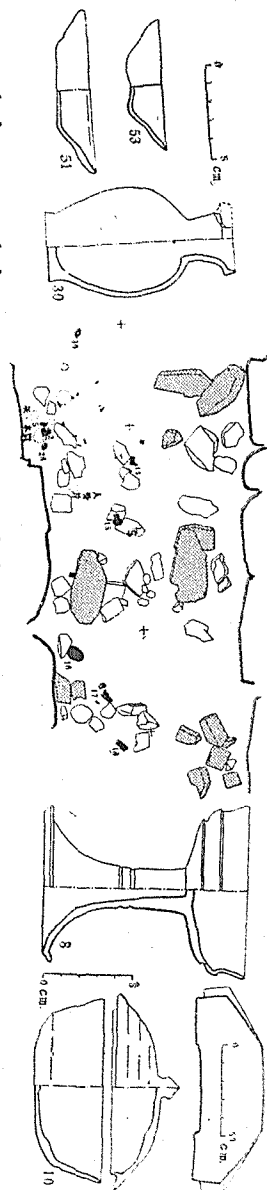
床は玄室全面から羨道の奥半分にかけて板石をしきつめ、入口辺は石敷がなく黄色粘土が露出してゐる。玄室内で石敷の下を探ると、板石敷のすぐ下には、厚さ五厘の黄色粘土層があり、その下に厚さ四〇厘内外の黒色土層があつて、地盤に達する。地盤は南方（入口の方向）に向つて次第に高くなつてゐる。側壁の石は、黒色土層によつてほぼ地盤の傾斜をただし、その上に黄色粘土を等しい厚さに敷いた上に積上げられている。したがつて石積は地盤に接し

ていないわけで、それがこの石壁の一部崩壊を早めたのかもしれない。

本調査でもつとも興味があつたことは、最初の石室營造後にも、数回にわたつて、この石室の中に埋葬の行われたらしい痕跡をみとめたことで、それによつて石室変遷の歴史の一端をたどることができようである。いま石室内の堆積と副葬品の出土状態をみると、四米辺から七米辺にかけての部分で、遺物の累積がみられる。最上には近代の茶碗や壺の破片、犬の遺骨などがあり、その下約五、六〇厘の間には多数の赤埴の小皿が含まれてゐる。それより下には厚さ二、三〇厘の黒土の間層があつて、その下に床石敷より約一〇厘の高位に一群の遺物がでる。須恵の壺口片(15)や高杯片(14)や土師皿(16)など、とくに玄室西南隅からは木炭や灰にまじつて火葬骨があり、須恵の小瓶(28・30・31)土釜(5)土師皿(2)鉄釘などが伴出している。しかも同じ層から石棺の破片が数個出土してゐるのも注目されよう。これが第二次の床面のものであつて、第一次の板石敷床面との間には約一〇厘の黒土層が介在する。しかし玄室の中央辺より奥にかけては、かかる層的關係がみとめられない。西北隅の床石がはぐれてしまつており、ここには副葬品もない。やや一方に片寄りすぎてはいるが、或いは石棺が安置されていた痕かもしれない。東北隅の床面上よりは蓋(9・26)



第一圖



第二圖

杯(10)高杯(8)長頸埴(36)などの一群の須恵器がでた。中央辺には隆平永宝(40)富寿神宝(41)の二枚の古銭があり、そのほかでは羨道の入口辺から須恵器の高杯(34)蓋(32)などが三、四個でている。以上の出土状態からすると、第一次と第二次の埋葬は混在していて、必ずしも第二次床面の出土品をそのまま第二次埋葬の遺物とするわけにはゆかない。たとへば同床面出土のうち石棺の破片や須恵の高杯の脚(14)、壺の口片(18)などは、第一次埋葬に属すべきもので、それが第二次埋葬の際にここに遺棄せられたと考えることもできよう。石棺片の一部は石室外にも持ちだされ、その一つには後世人面を彫刻したものがある。その作ゆきは鈍にして稚拙なものだが、大和古備姫王墓にある石像などと相通じた趣がある点興味をひく。玄室東北隅の一群の須恵器と、羨道入口辺の同資類もおそらく第一次のものではなからうか。しからは第二次関係の

ものはといへば、玄室西南隅の火葬骨と、それからあまり距たらなところ、第一第二床面上にある類、すなわち、土釜、土師皿、須恵小瓶、隆平永宝、富寿神宝、鉄釘などが考えられるであろう。第三次のものは4米辺から7米辺にかなりあつく堆積されていた赤焼小皿(51・53)の類であるが、その量はきわめて多く、人体埋葬の痕跡は明かでない。むしろその後の地方信仰の対象として、この石室が祠られていたのではないかともおもわれる。さらに後世においては、封土の側面にあげられた穴から廃物を遺棄し、塵捨場として利用されたものらしい。それぞれの年代については、第一次埋葬の資料として石棺と須恵器があるが、前者は破片が少量のため、いま一つ明かでないが、組合式の家形石棺に属し、蓋はあまり高くなく、上面の平坦部の幅がひろく、内面の割りこみも浅くて、同式棺としては末期に属するものであり、須恵器も古墳時代終末期の特色をそ

なえている。第二次の火葬骨の年代については、さきにあげた古銭が第二次床面からややはずれたところに存在する点に、一つの不安があるが、もし、これらを同時納入のものとすることができれば、ともに皇朝十二銭であり、隆平永宝が延暦一五年(A. D. 796)、富

寿神宝が弘仁九年(A. D. 818)のいずれも平安朝初期に鑄造されたことが指摘されよう。この火葬骨については、納骨器の存在が問われるであろう。周辺から灰や木炭がわずかながらでているほかに、

ややひろがった範圍から鉄釘片が十数個でている。ただこれが第二次床面のなくなりかけた付近に散布しているため、正しくどちらの床面に属していたかを確かめることができなかった。もしこれも仮定として火葬骨に結びつけるとするならば、ここに想像される木箱が納骨の用をはたしていたのであろうか。

一体横穴式石室は構造的に追葬に適している。したがって、もととは一人のために営んだものでも、同じ石室内に後世の埋葬を行

う可能性はつよい。たんに埋葬だけではない。なかに稻荷や弁天像などを祠る祠堂に利用したり、防空壕や倉庫に使つたり、あるいはギャンブルの遊び場となつたこともまれではなからう。石室内の堆積の状態から、かかる変遷をたどることも、発掘に際して見落してはならない点かと考えられる。

### 挿 図 解 説

第一図 石室断面図と第一次床平面図

第二図 (1) 中央(3米辺より7米辺まで)部の第二次床面、網

目の部分は石棺片。

(2) 第一次埋葬関係遺物 石棺蓋横断面、蓋杯⑩、高杯⑧

(3) 第二次埋葬品 須恵小瓶⑨

(4) 第三次堆積物 赤焼皿⑪⑫